特集

祝・金婚式！

50年目の絆

50年目の絆

東さんの場合

東　高志さん（73）・逸子さん（74）

――今年が金婚式ということは、昭和42年にご結婚されたのでしょうか？

逸子さん　いや、私たちは昭和41年の10月に式はあげましたね。届け出をしたのが昭和42年。

高志さん　明くる年に届けを出していたんだよ。

逸子さん　本当は6月くらいにあげる予定だったんだけど、この人が式の1週間前に事故にあっちゃって。

――それは大変でしたね。

高志さん　バイクとトラックの大きな事故で、3カ月入院した。

逸子さん　結婚前だったけど、看病に毎日行きましたよ。食事も病院で自炊してね。もう大変だった（笑）。

――その後無事退院して、10月に結婚式をあげた、と。そもそもの出会いは何だったんですか？

高志さん　そりゃあ、その頃はお見合いですよ。仲人さんに「いい子がいるよ」って言われて。

逸子さん　私がある結婚式に手伝いできているのを見かけたらしくてね。その後うちに来て会うことになって、そこからはとんとんと。

――結婚式はどんなだったんですか？

逸子さん　その頃は、外でやるか家でやるか移り変わりの時期だったけど、私たちは家でやりましたね。実家がある松山からハイヤーでここまで来てね。

――ハイヤーで！すごいですね。

高志さん　そのころは自家用車よりハイヤーの方がメジャーだったからね。昔ながらの結婚式で、花嫁の歩く道に壁をつくったりね。

逸子さん　「可愛い娘を嫁にやりたくない」って、花嫁側の親族が木や竹で作るの。それを仲人さんが壊しながら進んで、嫁入りするんですよ。

――それから50年。夫婦円満の秘訣はありますか？

逸子さん　まだ若いころは農業もあって暇がなかったけど、今はよく出かけてるの。お弁当買ってお花見したり、孫の駅伝の応援へ行ったり。買い物も二人で行くしね。

高志さん　まあ、生きてれば辛いときもあるから、仲良し100％ってわけにはいかない。だから、一番は「我慢」が大切だね。でも結婚相手は気を使わない人がいいと思うよ。

50年目の絆

和田さんの場合

和田　傅一さん（76）・寛子さん（73）

――和田さんご夫婦は昭和42年にご結婚されたということですが、どんな出会いだったんですか？

寛子さん　お見合いでしたね。わたしは就職で東京に行っていたんだけど、帰ってきてすぐその話がありました。

傅一さん　わたしも大工として弟子入りを関西でしていたんだけど、戻って来て。翌年の2月にもう結婚しましたね。

――早いですね！第一印象は覚えてますか？

傅一さん　晩だったから顔もあんまり見えなかったし、覚えてないよ！（笑）

――お二人ともご出身は末吉町？

寛子さん　そうです、二人とも。結婚式も旧末吉駅の前にあった「喜楽旅館」で挙げました。

傅一さん　その頃は家でする人も多かったから珍しかったんじゃないかな。

――新婚旅行はどちらに行かれたんですか？

傅一さん　指宿だね。

寛子さん　指宿に行く人が多かったんです。わたしたちが行ったときも、バスに乗ったら知り合いの人が2組、新婚旅行に来てて、大笑いしちゃった（笑）。

傅一さん　その時に記念樹として開聞岳にフェニックスを植えたんだ。そのあとも何度か見に行ったんだけど、みんな植えてくもんだから、自分のはもうどれかわかんない（笑）。

――結婚生活で印象に残っていることはありますか？

寛子さん　結婚してすぐ独立したから、子どものごはんだけじゃなくて、お弟子さんの分も昼ご飯つくったりして。

傅一さん　遠くだと薩摩川内まで家をつくりに行ったりもした。台風なんかがくると気が気じゃなくてね。

寛子さん　わたしも針に刺されるような気持ちでしたよ。夜中に2人で屋根にシートを張りにいったこともあった。3年前に仕事を辞めるまでずっとそんな感じでした。

――どんな50年でしたか？

寛子さん　辛いこともあったけど、もちろん楽しいこともたくさん。あっという間だったわね。

傅一さん　まあ、これからも健康に気をつけてやっていきたいね。

50年目の絆

榮徳さんの場合

榮徳　照子さん（77）・善司さん

――榮徳さんはひとり金婚者の集いに今年参加されたんですよね。

照子さん　そうですね。平成12年に夫が亡くなったので。でも、実はわたしたちが結婚したのは昭和38年なので金婚式はもっと前なんです。だけど、「せっかくだから、出た方がいいよ！」と言われて、聞いてみたら市役所もいいと言ってくださって。

――金婚式に出たことは、善司さんに報告しましたか？

照子さん　そうですね。いただいた賞状は仏壇に飾りましたよ。金婚式に行ってきたと報告も。

――結婚式を挙げられたのはもう54年前になりますが、当時のことは覚えていらっしゃいますか？。

照子さん　もうどこで結婚式をあげたかは今、思い出せないですね（笑）。家じゃなくて都城でやったことは覚えているんだけど。

――どんな出会いだったんですか？

照子さん　お見合いですよ。もう仲人さんの口のうまさに騙されていったような（笑）。でも、当時は会ってから2～3カ月で結婚が普通だったんですよ。

――結婚してからお互いを知るというのが普通だったんですね。

照子さん　そうですね。わたしが22歳の時、夫は30歳の時に結婚して、もちろんいいことばっかりなかったけどね。休みの日は一緒に登山に行ったりして。

――二人とも登山がお好きだったんですか？

照子さん　子どもたちも好きでね。家族4人で登りに行ったりしました。九州はほとんど登ったんじゃないかな。屋久島の宮之浦岳も登ったし、富士山も2回登って。夫は定年より2年早く仕事を辞めて。それから病気になるまでは一緒にいろんなところに行きました。

――趣味が合うご夫婦だったんですね。

照子さん　アウトドア派でね。わたしは今でも、外に出てる方が好き。娘のいる福岡に行ってるときも近くの山に登って往復1時間くらい歩いたり。元気が一番だから、足腰を鍛えるのはもちろん、ストレスをため込んじゃダメ。身体を動かすと気持ちもすっきりするでしょ。だから、晴れてたら畑に苗を植えて、草むしりをしたりしてね。すごく、大事よ。

50年目の絆

前山さんの場合

前山　義一さん（88）・恵子さん（73）

――お二人とも財部町のご出身でしょうか？

義一さん　そう。実家は城山の方でしたね。財部町の中心地で自分でクリーニング屋を始めていました。

恵子さん　わたしも地元は財部で。当時はもう学校の先生をしていて、財部南小で働いていました。

――年齢をお聞きしたら、年の差15才なんですね。お見合いですか？

恵子さん　いえ、違うんです。前に財部駅の近くにあった「いずみや」さんで声をかけられたんだけど、よかにせだったからポーッとなっちゃってね。出会って3カ月で結婚したの。年齢は結婚するときに聞いて（笑）。

義一さん　聞いてこないから（笑）。わたしは年が離れてたから、すごく反対されるだろうなと最初は結婚なんて考えてなかったんだけどね。

恵子さん　親に反対されたんだけど押し切って（笑）。でも、背が高くてね。斜め後ろからみる後頭部がすごくかっこよくて、いつも少し後ろを歩いてたの。

――なんて素敵なお話…！ 結婚されたあと、恵子さんは教師、義一さんは自営業で共働きだったんですね。

義一さん　そう、もうクリーニング屋は50年以上したかな。末吉や岩川まで行くこともあった。当時は珍しい全自動の機械をいれててね。多い日はお店に80人くらいお客さんが来たこともあったんだよ。

恵子さん　この人は本当に仕事一筋で。わたしも教師を55才まで続けたから、家庭に仕事に大変だったけど、実家の親には絶対泣き言ひとつ言わなかった。反対されて結婚したから「ほら！」って言われたくなかったのよね。

――年の差をものともせず、こうしてお二人でお元気なのは嬉しいですね。

義一さん　今は日光神社の宮司をやっているからなかなか忙しくて、いろいろ予定が入る。でもこうして毎日働けていることはいいことだな。

恵子さん　わたしもお店があるから、こうして働けるのはボケ防止にもいいのかも（笑）。家族旅行はほとんど行かなかったけど、今は、この人が好きなお寿司を二人で食べに行ったり、ビールを分け合って飲んだり、楽しくやってますよ。これからも「健康第一」を目標に過ごしていきたいですね。

曽於市では、その年に結婚50周年を迎えられる方を対象に合同金婚式とひとり金婚者の集いを行っています。

市報そお8月号や8月中旬の自治会使送便、SooGoodFM放送を通じて、式典の開催日や会場などを広報し、参加者の申込みを募集しました。

今年度はご夫婦での参加が51組、おひとりでの参加が19名の総勢121名の方が参加されました。

10月27日（金）午前10時から式典が始まり、金婚者の皆さんには祝詞と記念品の贈呈が行われました。

式典のあとは、アトラクション。第一部は檍幼児学園による「中園べぶ踊り」。これは、元来、稲の豊作を招くための予祝行事とされており、一時は途絶えていましたが、檍幼児学園の園児たちが復活させたものです。この日は金婚式にちなんで「ごじゅんけ（結婚式）」の演目。子どもたちの鹿児島弁と演技に、会場は笑いで溢れていました。

アトラクションの第二部は、深川真理さんによるトークショー。巧みな鹿児島弁でイベントを盛り上げる深川さんの話術に、皆さん満面の笑顔。

最後は祝弁当を受け取り、皆さん会場を後にしました。

金婚式に関するお問い合わせは…　財部支所　福祉事務所　0986-72-0744